

くすりばこ



薬剤部 部長
相澤 学

103.お薬の名前(漢方薬編)

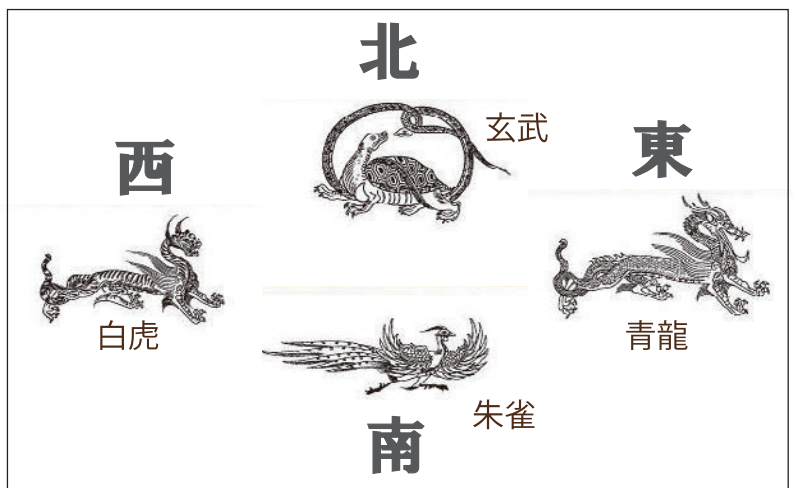
今、お薬を手にしてお読みの方々もいらっしゃると思いますが、今回はお薬の名前についてお話したいと思います。一般的にはカタカナの名前の薬が殆どですが、今回は漢字の名前の漢方薬についてお話します。その前に漢方薬についてお話すると中国の薬と思う人も多いと思いますが、中国医学を基に日本独自に生薬を組み合わせたお薬です。また漢方薬は症状だけでなく体力など体質に合わせて使用されます。

さて本題の漢方薬の名前ですが、まずは構成している生薬の数が由来になっている漢方薬があります。例えば、血行を改善し水分を保つ「四物湯(しもつとう)」は、ジオウ・シャクヤク・センキュウ・トウキの4種類の生薬、水分のバランスを整える「五苓散(ごれいさん)」は、タクシャ・ソウジュツ・チョレイ・ブクリョウ・ケイヒの5種類の生薬が配合されています。因みに胃もたれや食欲不振などに用いられる「六君子湯(りっくんしとう)」はソウジュツ・ニンジン・ハンゲ・ブクリョウ・タイソウ・チンピ・カンゾウ・ショウキョウと6種類ではなく8種類の生薬が配合されているトラップもありますので注意が必要です(別に注意する必要もないとは思いますが…)。四・五・六とくれば「七味唐辛子(しちみとうがらし)」が思い浮かびます。あっ！これは漢方薬ではありませんね。ただし七味唐辛子には唐辛子以外に、山椒(サンショウ)や陳皮(チンピ)が配合されていますが、これらは生薬としても使われています。

次に「安中散(あんちゅうさん)」や「清肺湯(せいはいとう)」など薬効が名前の由来になっている漢方薬もあります。「安中散」の“中”は体の中の中央、つまり胃腸を意味します。胃を整え安らかにするという意味が名前の由来です。他にも胃腸の動きを促すなどの効果のある「大建中湯」も同様の由来です。また「補中益気湯(ほちゅうえっきとう)」は胃腸を補い、元気を益すという意味ですし、「清暑益気湯(せいしょえっきとう)」も暑さで弱った胃腸を元気にして体力を回復するという意味です。「清肺湯」も名前の通り、痰の多く出る咳などに効果が期待されますし、「潤腸湯(じゅんちょうとう)」なども読んで字の如く便秘の薬と分かります。

さて、「小青竜湯(しょうせいりゅうとう)」という鼻水などのアレルギー症状などに効果が期待できる漢方薬があります。この名前は、キトラ古墳の壁画などで有名な中国の四神(東の青龍・

南の朱雀・西の白虎・北の玄武)の青龍が由来です。他にも四神由来の漢方薬に、熱のこもりを鎮め喉の渇きなどを抑える「白虎加人参湯(びゃっこかにんじんとう)」や、新陳代謝が衰え虚弱な人の下痢など胃腸の不調などに用いられる「真武湯(しんぶとう)」があります。ちなみに「真武湯」は昔“玄武湯”と呼ばれていました。すこし話が逸れますが、会津藩で有名な“白虎隊”も四神が名前の由来で、他に青龍隊、朱



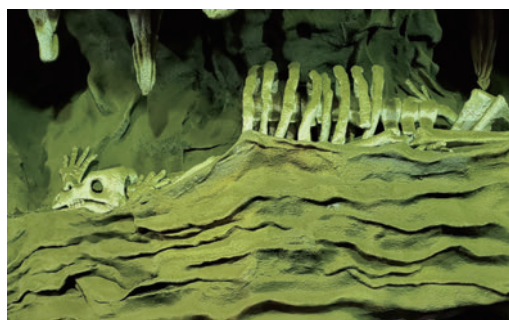
雀隊、玄武隊も存在しました。

他には配合されている生薬が名前の由来になっている漢方薬があります。筋肉の凝りをほぐし、こむら返りなどに効果のある「芍薬甘草湯(しゃくやくかんぞうとう)」に含まれる生薬は名前の通り芍薬と甘草の2種類のみです。ちなみに名前の最後の“湯”は、昔は煎じて服用していたという意味です。一般に配合される生薬が少ない程、効きが強く速攻性と言われています。芍薬甘草湯のように配合されている生薬がそのまま名前になっている漢方薬はあまりありませんが、配合されている生薬が名前の基になっている漢方薬は他にも、風邪のひき始めなどに使用される「葛根湯(かっこんとう)」、血のめぐりを改善する「桂枝茯苓丸(けいしぶくりょうがん)」、気持ちを安定させ不眠などにも使用される「柴胡加竜骨牡蛎湯(さいこかりゅうこつぼれいとう)」など色々あります。ちなみに「桂枝茯苓丸」の“丸”は元々丸めて“丸剤”と使用していたという意味です。また「柴胡加竜骨牡蛎湯」の“牡蛎”は二枚貝のカキの貝殻を生薬にしたものです。また“竜骨”と聞くと恐竜の骨(写真1)をイメージしますが、哺乳動物の化石を生薬にしたものです。このように生薬は植物由来だけでなく、動物や鉱物由来のものもあります。

動物由来の生薬として、蟾酥(センソ)はヒキガエルの耳腺(耳下腺、皮脂腺)の分泌物で、いわゆる“ガマの油”です。また牛黄(ゴオウ)は牛の胆石、鹿茸(ろくじょう)は鹿の袋角、阿膠(アキョウ)はロバ皮から作られる膠(にかわ)、熊胆(ユウタン)はその名の通り熊の胆汁を乾燥させた生薬です。

話は変わりますが、生薬から合成された西洋薬もあります。一例として、昨年はコロナの影響が流行しませんでした。インフルエンザに使用されるオセルタミビル(先発医薬品名タミフル®)は生薬の八角(ハッカク)から採取されるシキミ酸から合成されます。そこで八角と言えば日本相撲協会理事長の八角親方を思い浮かべる人もいるかも知れません。生薬の八角と大相撲の八角親方の共通点をご存じでしょうか？どちらも「ホシ」に関係しています。生薬の八角は(写真2)のとおり8個の角がある星型(ホシ型)です。八角親方の現役時代の四股名は保志(ホシ)ですから(注:大関昇進後より北勝海に四股名を変更)。

今回は漢方薬の名前から途中で何度か話が逸れながら、最後は力士の名前に話題が変わってしまいました。大目に見てくださいね。



竜骨のイメージ(写真1)



八角(写真2)